

自律性の喪失

—内的な悪循環の仕組み—

高橋 徹（倫理文化研究センター専門研究員）

私たちの内面にあるこの虚構の自己を克服することが、独自の生き生きとした自分を取り戻し、私たちの人間性の実現化に、私たちを導く。（アルノ・グリューン）

戦士にとっての戦いは、個人や集団の愚行でも、悪意に満ちた暴力でもない。戦士の戦いとは、人間から力を奪いとろうとする個々の自我意識との闘いなんだ。（ファン・マトゥス）

はじめに

今年（2017年）5月14日に開催された「倫理研究フォーラム in 鹿児島」と、本『紀要』の原稿の締め切りがたまたま重なった。同フォーラムの全体テーマは「新しい自分の発見——より良く、創造的に生きるために」、筆者の発表タイトルは「自己承認を求めない生き方」だった。

このフォーラムの準備のために、どんな発表内容にするかを検討し、資料を集め、素案を書きはじめたら、いつのまにか中身が膨れ上がって、かなりの分量になってしまった。とても定まった発表時間の中に収まらないし、当日の配布資料のページ数も限られている。

そこで、フォーラムで発表する内容は口頭で伝えやすい事柄に絞り、それ以外を本『紀要』の論文としてまとめ直すことにした。この拙論では、人間が自分を認めてもらいたがるのは「自律性の喪失」が主たる原因ではないかという観点から、その否定的な側面について掘り下げた。というのは、われわれの多くが知らず知らずのうちに自律性を喪失し、それにより個人および社会における解決不可能な諸問題を引き起こしているにもかかわらず、われわれはその原因とプロセスについて、ほとんど何も気づいていないし、理解もしていないというのが筆者の論点だからである。

自律性を喪失した現代人は、夢遊病（夢中遊行症）者にたとえることができる。自他や周囲の状況を正しく認識できないばかりか、ふと我に返るまで自分が何をしていたのかさえ、後から振り返ってもよく覚えていないのだ。われわれのこの病的症状は根深く、実際は暗闇の中を歩いている、それを日当たりの良い快適な場所だと錯覚している。われわれは自分が闇の中を手探りで歩いているばかりか、どこにもたどり着けずに迷子になっているという現状にまず目覚める必要があるのではないか——ここでいう「自分」は、そのまま現在の人類全体にも当てはまる。われわれは自覚症状のない慢性的な病に罹患している。

このような眺望から、前述の暗闇に相当する〈自律性の喪失に伴う諸症状〉を詳細に示し、その内部メカニズムを整理することにした。人は絶望の中でこそ、希望の光を求める。どん底やごえるような寒さを肌身に感じてこそ、明かりと暖かさのある方向をみずから目指し、そこに向かって確かな歩みを進めることができる。

以上のような理由から、本論では人間心理にまつわる否定的な側面を包括的に取り上げることにした。

なお、本論の引用文からも推察されるとおり、以下の考察は一昨年亡くなったドイツ語圏で著名な精神分析家、アルノ・グリューン（1923～2015）の知見にその多くを負っている。晩年にいたるまで旺盛な執筆活動を続けた同氏に感謝の意を込めて、本稿を執筆した。